

旭川医大 病院ニュース



(編集) 旭川医科大学病院
広報誌編集委員会委員長
廣川博之

<http://www.asahikawa-med.ac.jp/>

腫瘍センターの ご紹介

腫瘍センター長
鳥本悦宏



昨年12月より卒後臨床研修センターの向かいに腫瘍センターができ、本格的に活動を開始しました。日本人の死因第一位はがんで、3人に1人はがんで死亡しています。また、今後人口の高齢化を迎えて益々がんで亡くなる方は増加していくことが予測されています。そこで、昨年4月「がん対策基本法」が施行され、がん対策が総合的、計画的に推進されることになりました。このような国の方針を受けて、本学におけるがん診療の向上を主たる目的に腫瘍センターは設立されました。現在、本学では、色々な診療科で多くのがん患者さんが、外科治療や放射線治療、薬物治療などを単独あるいは組み合わせで受けています。しかしながら、が

んに対する治療法は年々新しい技術、機器、薬物が開発され専門化しており、専門領域以外の最新情報は分かり難くなっています。また、がん治療を受けている方の苦痛を和らげるために緩和医療チームも活動していますが、国が求めている治療初期からの緩和医療的関わりが十分できているかという点も必ずしもそうではありません。わが国のがん診療は基礎研究を含めて世界をリードするような領域や、胃がんや子宮がんなど検診制度の確立が功を奏し、その死亡率が減少しているものもありますが、不備な点も多くあります。例えば、死亡診断書からがん死亡率はわかるものの、がん患者の発生数に関してはきちんとした統計がありません。また、がん診療を担う放射線療法や薬物療法の専門医、看護師、薬剤師などの専門スタッフも不足しています。患者さんや家族の方を支える支援体制も不十分ですし、専門病院と地域に密着した「かかりつけ医」との連携も整備されていません。腫瘍センターでは、院内外の多くの部署のご協力を得ながらこういった問題に対応し本学のがん診療レベルの向上につなげてゆきたいと考えています。よろしくお願いたします。

がん診療相談 支援センターの 開設にあたり

腫瘍センター
がん診療相談支援センター
田中理佳



がん対策基本法が今年の4月より施行され、がん医療水準の均てん化が大きな課題となっています。中でも、がん医療に関する情報の収集提供体制の整備が強く求められており、当院においても今年1月にがん診療相談支援センターが開設されました。相談予約は、2階腫瘍センターの事務員が対応し、実際のがん相談は1階病院ライブラリー奥にあるがん診療相談支援センターで行う

予定です。2月下旬の部屋の完成を待ち本格的な活動を開始致します。

相談内容は、①診断や治療に関すること②がんに対する不安や悩み③セカンドオピニオンについて④緩和ケアについて等、患者さまご本人だけでなくご家族の方も対象とし、がんと向き合う皆さまをご支援出来るよう努力していききたいと思います。相談に来ていただいた方々と共に学びながら、解決の糸口を一緒にさがしていきたいと考えています。どんな些細なことでもかまいません。気持ちを表出する場としてご利用頂くのも結構です。予約制とし、十分に時間をとった対応を考えています。新たに新設されるがん診療相談支援センターの『がん相談員』という立場を重んじ、信頼されるセンターを目指し努力していききたいと思います。今後ともご指導の程よろしくお願致します。

◆海外医療援助

ベトナムにおける
口唇口蓋裂治療に参加して

歯科口腔外科学講座 松田 光悦

昨年末12月21日から12月29日まで、吉田学長の許可のもと、特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会(JCPF)主催の口唇口蓋裂患者に対する海外医療援助活動、第36次ベトナム診療隊に、旭川医大チームとして参加してきました。



特定非営利活動法人日本口唇口蓋裂協会(JCPF)は、平成4年1月1日に発足した、先天的な口の病気の子ども達の健全な成長を願い、医師、

患者、医療関係者、企業、その他一般の方々によって活動している、我が国最大の口唇口蓋裂についての非営利ボランティア協会です。平成15年4月には、国連認定法人(ロスター)の資格を得ております。活動内容として、国内では口唇口蓋裂ホットラインの設置、会報の発行、講演会などの開催、口唇口蓋裂遺伝カウンセリング、遠隔言語訓練システムの開発、運営などを行っており、国外においては主にベトナムを中心とし、インドネシア、ミャンマー、モンゴル、チュニジア、中国、バングラデシュ、ラオスなどアジアにおける口唇口蓋裂患者への無料手術や、現地医療者への技術移転活動、海外の障害児を持つ家庭や、貧困に苦しむ人々が自立できるよう支援を行っております。また国際口唇口蓋裂協会(JCPF)の、事務局として医療者、患者、ボランティアのグローバルなネットワーク作りを行っています。

今回は、ベトナム社会主義共和国、ホーチミン市の南にあるメコンデルタ地帯、ベンチュエ省での診療・研究活動でした。ここでは過去15年間に、約1,300人の口唇口蓋裂患者を治療しており、今回は36回目のミッションでした。診療隊は、北大(歯)、愛知学院大学(歯)、大分大学、佐賀大学、鹿児島大学(歯)そして旭川医大から口腔外科医17名、麻酔科医4名、小児科医、産婦人科医各2名ずつ、病理医1名、歯科矯正医、歯科補綴医各1名、看護師・歯科衛生士・助産師10名、学生を含めたボランティア

参加4名、現地通訳4名の計46名で構成され、活動して参りました。12月22日の午前3時頃、現地に到着し、ベンチュエ省のゲストハウス(宿泊場所)に入り、ほとんど仮眠程度の休息後、午前10時頃から、当地のグエンデインチュウ病院へ移動し、手術の準備から始まりました。日本の現状からみて、20年以上は昔へタイムスリップしたであろうと思われる機器類(麻酔器を含め)を相手にしばし呆然としたのを思い出します。今回は、手術希望者が80名くらいおりましたが、術前診察を小児科医、麻酔科医、そして口腔外科医が中心となって行い、手術可能な45名が選ばれました。翌日は日曜日でしたので患者宅訪問、障害児施設訪問などの活動を行い、夕方には知事主催の歓迎レセプションが行われ、そこで本協会はベトナムにおける長年の活動が認められ、副大統領から「3等労働勲章」を授与されました。月曜日から、それぞれ3つの手術室に分かれ、1日12例ずつ(最終日は9例)を4日間に渡って治療しました。術者は交代で1日2例ずつ手術をしますが、麻酔医と看護師が休み無しで活動しかつ現地の麻酔医や看護師への技術指導も行うため、かなり過酷な状況下での活動を強いられました。麻酔医、看護師の参加の増加が望まれております。日本の

様な先進国では、この疾患に対し出生直後から一貫した治療が行われ、手術もさほど難しいものはないのですが、こちらでは放置されて成長しますので、難しい症例が多くしかも手術直前に術式を判断するといった状況です。



旭川医大チームは私(松田)と吉田将亜助教、他大学からの麻酔医と看護師1名の計4名という省エネ最小チームでした。それでも今回は事故もなく無事終了し、安堵を覚えて帰国しました。

ベトナムは今、発展途上にありめまぐるしく進歩してきておりますが、まだまだ貧富の差が大きく、また健康保険の制度も整備されておらず、貧困家庭の子ども達は、われわれが行くのを何年も待っています。この治療技術が、科という単位ではなく、旭川医大として、世界の役に立てばと思っております。今後も継続して参加する予定ですので、是非皆様のご協力をお願いいたします。 文責 松田 光悦

手術日の付添者の
駐車料金について

駐車場管理小委員会では、患者医療相談等に係る検討委員会委員長からの提言を受け、手術日の付添者の駐車料金については、患者サービス向上の観点から割引制度を設けることとし、次のとおり取り扱うこととしました。なお、この取扱いについては、昨年12月19日開催の病院運営委員会へ報告を行い、本年1月4日から実施しています。

(総務課)

【手術日の付添者の駐車料金】

区分	内 容	備 考
駐 車 料 金	1台500円	通常は、入場から4時間30分までが500円
制 限 台 数	ありません。	
手 続 き	病棟で「手術確認証」の証明を受け、駐車券に「手術日の付添者 駐車場使用割引許可申請書」を添えて旭仁会で手続きを行う。	時間外及び休日は、防災センターで手続きを行う。

ロシア・ ユジノサハリンスク市からの 院内視察について

2月18日（月）、旭川市の友好都市であるロシア・ユジノサハリンスク市から、医師2名が、本院を訪れました。

これは、両市が実施している医療交流事業の一貫で、今年は2月16日（土）から2月23日（土）まで、旭川市に滞在し、市立旭川病院での研修を中心に、市内の医療機関を視察、医療制度の違いや、診療内容について、情報交換しました。



今年の研修テーマは、心臓超音波検査（循環器内科）で、訪れたエレナ・スタルツェーバさん（30）とリリヤ・シャピロさん（28）は共に、心臓及び血管超音波研究などが専門の、ユジノサハリンスク市内の病院に勤務する医師です。

初来日の二人は、通訳を介しながら、本院の構造、女性医師の比率などについて、ロシアの医療事情を交えながら、病院長と談話、その後、約2時間にわたり、心臓超音波室で視察研修を行いました。

（経営企画課）

道北・オホーツク地区 エイズ拠点病院 連絡協議会について

2月9日（土）に、道北・オホーツク地区エイズ拠点病院連絡協議会及び研修会が開催されました。

網走、北見、旭川など、各地のエイズ拠点病院の医師、保健師、ソーシャルワーカーらが出席し、最



近の情勢、治療法について協議を行いました。

またその後、荻窪病院 副院長・血液科部長の花房秀次先生、及び釧路労災病院 副院長の宮城島拓人先生の講演があり、協議会出席者をはじめ、病棟看護師らが多数詰めかけ、盛況のうちに終了しました。

（経営企画課）



『精神科神経科において PSW(精神保健福祉士)が果たす役割』

精神科神経科 精神保健福祉士 芥川 愛

平成18年11月末より、精神科神経科において、PSW (Psychiatric Social Worker:精神保健福祉士)として勤務しております。私の仕事は、当科に通院中・入院中の患者様やご家族のさまざまな相談に応じることです。具体的には、受診援助、療養上の問題解決と調整、経済的問題調整、就労支援、日常生活に関する助言・指導、入院中の患者様の、退院後の生活に必要な社会資源利用のコーディネート、退院後の生活における地域社会資源と連携したサポートなどです。

精神科の患者様の生活を支える社会資源の中には、地域支援センターや精神科デイケア、精神科訪問看護などがあり、状態に合わせ効果的に利用することが必要です。しかし、精神障害を抱える患者様は、急性症状が落ちついた後、意欲の減退や活動性の低下、認知障害など、心理的、情緒的な生活障害に悩んでいる場合があります。自分で助けを求めることができなかつたり、孤立している場合もあります。そのため生活を支える資源と適切

に結びついていないことから、結果として症状悪化や再発を繰り返してしまう場合もあります。これらを防ぐためには、治療を含めた生活全般についてのコーディネートが必要です。

PSWは、患者様の基本的人権を尊重し、医療と福祉の両面から、患者様の状態像や、家族背景、経済状況について評価するとともに、患者様を治療の対象(医学モデル)としてだけではなく生活者(社会モデル)としてとらえることによって、さまざまな生活障害を把握していきます。現在私は、医師や看護師などの医療スタッフと連携しながら、一人ひとりの患者様に適した福祉サービスは何か、効果的なリハビリテーションはどうあるべきかを検討し、社会資源についての情報提供や利用援助、家族支援などを行っています。

今後も患者様の精神保健を支えるチームの一員として尽力して参りますので、どうぞよろしくお願いたします。

クリニックがやってきた!!

3月3日(月)の午後、クリニック(臨床道化師)が、小児科病棟を訪問しました。

「クリニック」とは、「病院」(クリニック)と「道化師」(クラウン)とを合わせた造語で、入院している子供たちを訪ね、遊びやユーモアを届け、子供たちの笑顔を育む道化師のことです。

オランダで90年代から盛んになり、日本でも2005

年10月に、大阪で「日本クリニック協会」が設立され、徐々に現場に浸透しつつあります。

今回は、同協会から、2人のクリニック「TOMO(トモ)」と「898(パクパ)」



が、来てくれました。

北海道での活動は、旭川医大が始めて。入院している子供たちも、クリニックの訪問で

積極的になり、二人を追い掛け回したり、赤い鼻を付けて貰って喜んだりなど、楽しい時間を過ごしました。

また、付き添いのお母さんや医療スタッフとも、ユーモラスにコミュニケーションをとり、病棟は笑顔に包まれました。



(経営企画課)

【薬剤部】

新薬紹介 (52)

エプレレノン (セララR錠)

エプレレノンは、既存の高血圧症治療薬と異なり、アルドステロン受容体（ミネラルコルチコイド受容体）を選択的に阻害する薬剤である。アルドステロンは、副腎皮質から分泌されるステロイドホルモンの1つであり、レニン・アンジオテンシン・アルドステロン（RAAS）系の最下流に存在し、腎臓の遠位尿細管においてナトリウムや水の再吸収を促進することで、体液量を増加させ血圧を上昇させる。近年、このホルモンの過剰により、心臓・腎臓・脳などに直接障害が引き起こされることが明らかになってきた。本剤は、RAAS系でアルドステロン受容体を阻害することで、血圧降下や臓器保護を示すことが期待される。事実、米国では、高血圧症のほかに「心筋梗塞後のうっ血性心不全」にも適応を取得している。

またアンジオテンシン変換酵素阻害薬（ACE阻害薬）やアンジオテンシンⅡ受容体拮抗薬（ARB）との併用も有効と考えられている。特に、ACE阻害薬やARB投与において、血中アルドステロン濃度が減少せず、降圧効果が得られない現象が知られているが、本剤の併用でこの問題が回避できる可能性がある。

本剤の特徴は、高い受容体選択性にある。同じ作用機序を持つスピロノラクトン（アルダクトンA®）は受容体選択性が低く、アンドロゲン受容体やプロゲステロン受容体をも阻害する。その結果、内分泌・性腺系の副作用（女性化乳房、月経異常など）がある。これに対して、本剤は受容体への選択性が高く、こうした副作用の発現頻度は低い。しかし、スピロノラクトンをはじめACE阻害薬、ARB、などと同様に、血清カリウム値の上昇には注意が必要である。したがって、投与前に患者の腎機能を確認するとともに、投与中の患者の血中カリウム濃度には、常に注意を払う必要がある。また、CYP3A4で代謝されるため、併用薬剤や食品との相互作用にも注意が必要である。

（薬品情報室 梅津 典子）

輸血・細胞療法部門発 ⑤

佐藤秀一事務官の
退職にあたって

当院輸血部門の生き字引、佐藤秀一さんが退職されます。輸血部一筋に31年3ヵ月間、勤務されてきました。その間、病院長は8代、輸血部長は7代替わっています。輸血を使う第一線の医師・看護師と日々向き合う仕事のため精神的なストレスも多かったと思いますが、輸血の発注、保管、搬送、回収などの業務を着実・円滑にこなしていただき感謝いたします。お聞きするところでは、血液行政や院内システムの目紛しい変化にともなう業務の変容に戸惑いつつも、一部署で仕事を続けてこれたことに満足感を抱いているとのことでした。

開院時に設置された輸血室（現在の外来採血室の周辺）に佐藤さんが配属されたのは1976年12月でした。兼任の輸血室長（故関口定美第二外科助教授）がいましたが、専任の教官や技官は配属されず、佐藤さん一人で輸血の発注、管理、供給業務を開始しました。1989年6月輸血部が設置され、教官1名と

検査技師2名が配属され現在の形になり、2006年1月には現在の場所に移転しました。

ここで輸血の出庫・搬送業務についてみてみましょう。ご承知の通り、時間内は佐藤さんが使用部署まで輸血をお届けしています。再開発時、時間外に輸血を使う方々の負担軽減と安全性確保のため、当直技師による時間外輸血業務一本化を視野に入れ、緊急検査室と輸血部門が隣接するよう要望していましたが叶いませんでした。現在、検査技師1人当直体制の中、増え続ける緊急輸血への支援体制をどのように構築すべきか苦慮しています。時間内においては佐藤さん退職後も現態勢を維持していきますが、本文執筆の段階では後任は決まっていません。業務の円滑な継続に努力しますが、皆様のご援助が必要になることがあるかもしれません。その際にはよろしくご協力下さい。



（臨床検査・輸血部 副部長

輸血・細胞療法部門 紀野 修一）

みどりの保育園 1周年

大学の森 みどりの保育園が開園して1年が過ぎました。
現在、園児は一時保育も含め23名と徐々にではありますが賑やかになってきています。

毎日寒い日が続いていますが、みどりの保育園の子ども達は元気にそり滑り・雪だるま作り・雪道散歩など北国の冬遊びを楽しんでいます。

中でもそり滑りは、みんな大好きで今年初滑りを体験した1才児から5歳児まで、大歓声をあげて山から滑り降りて来ます。

節分には、「鬼は外！」「福は内！」と大きな声で豆まきを楽しみました。

4月には進級をして、一段と成長した子ども達の姿もご覧いただける事でしょう。

また、春からの新しいお友達を迎える事も楽しみにしています。



【園児数】2月1日現在

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児	6歳児	計
月極	1名	5名	8名	2名	2名	1名		19名
一時	1名				1名		2名	4名

平成19年度 患者数等統計

(経営企画課)

区分	外来患者数			一日平均外来患者数	院外処方箋発行率	紹介率	入院患者延数	一日平均入院患者数	稼働率	前年度稼働率	平均在院日数(一般病床)
	初診	再診	延患者数								
10月	1,612	28,874	30,486	1,385.7	71.25%	58.19%	15,586	502.8	83.52%	88.03%	16.09日
11月	1,505	26,851	28,356	1,350.3	70.58%	58.14%	15,236	507.9	84.36%	89.31%	16.10日
12月	1,299	25,232	26,531	1,396.4	69.99%	60.97%	15,143	488.5	81.14%	83.54%	16.59日
計	4,416	80,957	85,373	1,377.0	70.63%	58.99%	45,965	499.6	82.99%	86.96%	16.25日
累計	13,901	239,110	253,011	1,360.3	70.68%	57.96%	140,229	509.9	84.70%	87.21%	16.60日
同規模医科大学平均	14,240	176,614	190,854	1,028.8	85.29%	52.83%	141,819	515.7	84.86%	85.55%	18.62日

※前号の数値に誤りがありました。
お詫びして訂正いたします。

	(誤)	(正)
前年度稼働率の計	87.88	86.77
前年度稼働率の累計	87.88	87.33
前年度稼働率同規模大学平均	85.17	85.87

編集後記

この原稿を書いている今、中国産の餃子に含まれていた殺虫剤成分のため食中毒患者が発生し日本中が大騒ぎとなっている。迅速に正確な情報公開がなければ不安は増すばかりであり、実際、事件が伝えられた直後から市場は敏感に反応し、餃子以外の中国製品に対しても拒否反応を示している様子が伝えられている。まさに日本国中が「糞に懲りて膾を吹く」騒ぎのようである。これが紙面に載る頃には何らかの解決がされていることを期待しているが、少なくとも危機管理について考えさせられる事件であることには間違いない。

たとえ一部のミスであっても全体がマイナスの色眼鏡で見られる事はよくあることで、普通に頑張っ

ていてもその中にいるというだけで肩身が狭い。一方で、自分に関わっている人や団体が活躍したり良い事で注目を浴びるとなぜか誇らしい。嬉しいニュースが続き、日々誇りを持って仕事ができる環境が理想と思う。(眼科 石子 智士)

時事ニュース

News

- 1月18日(金) ……精神病院実地指導
- 2月5日(火) ……医療監視
- 2月9日(土) ……HIV臨床カンファレンス講演会
- 3月27日(木) 予定…病院ボランティア表彰式